

こだわりの 夏休みふたり旅

「信長と家康の桶狭間」 (武将シリーズ その9)

2017-8-18～20 遠藤俊一



「おじいちゃん、あそこだ、あそこを左に曲がるんだ」

「うん、あれがスーパーだな、カーマッって書いてある。さっきのおばちゃんの言う通りだ」  
まもなく、向うの公園らしきところに青い幟が見えてきた。

「あれだ、あれだ」

「おう、あれだ、あれだ」

「桶狭間だ」

「うん、桶狭間だね」

私たちは桶狭間の古戦場跡に到達した。

今年の夏休みこだわりの旅は、初めて“ふたり旅”になった。

孫の智<sup>とも</sup>くんとのおふたり旅だ。

遠藤智<sup>ともひろ</sup>洋、14歳、中学3年生である。

わが子俊洋の長男で、彼が生まれた時は、これで遠藤家は更に先々に繋がっていけるぞと大喜びした。胸の中で、父母に「お父さん、お母さんやりましたよ」と報告したくらいだ。彼は私の隣の家に住んでいるし、中学で卓球部に入ったから、ますます私とは縁が深くなっている。その智<sup>とも</sup>くんとのおふたり旅だ。

智<sup>とも</sup>くんの弟のあ<sup>あきひろ</sup>っ君（瑛洋）は明年の中学受験を控えて、今年の夏は忙しい。家族の夏旅行も例年に比べて短いものになっている。それで、私の妻が気を利かせて智<sup>とも</sup>くんに「おじいちゃんと一緒に旅行したら」と声を掛けたいらしい。私にことわりもなく。まあ、実は私もまんざらではなく、とんとん拍子に決まってしまった。

さて、行くと決まって、初めての孫とのふたり旅だ、どこへ行こうかと考えた。普通の観光旅行にはしたくない。おじいちゃんらしい旅だと孫には思ってもらいたい。

それなら、誰にも出来ない私ならではの旅だ、こだわりの旅「武将シリーズ（その9）」にしようとするま決めた。

実は今年のこだわりの旅をどうするか迷っていた。第1候補の「島津の九州北上」は準備不足で島津の城を全部は特定できていなかった。第2候補の「信長の桶狭間」は、例年3泊4日で行っているが、これは2泊3日で済んでしまいそうだと躊躇していた。

ぐずぐずしているうちに6月中頃になり、私の記念すべき城廻り200番目、201番目を7/1～3に実行した。これを「200番目の城（高天神城）、201番目の城（観音寺城）」として（シリーズその9）にしてしまおうかと迷っていた。

そんな時に、孫とのふたり旅が浮上した。日程は2泊3日で8/18（金）～20（日）しか智くんは空いていないという。

それで、私らしい旅なら、もうこれしかない「桶狭間」でゆこうと決めた。

それも、信長だけでなく、家康（当時は松平元康）の足跡も辿ろう。

テーマは「信長と家康の桶狭間」だ。

#### 第1日（8月18日）

午前8：30、智くんの家の門でチャイムを鳴らす。この家に私と妻が住んでいた。子供が結婚するまでは息子も娘も一緒に住んでいた家だ。智くんの小学校入学を機に家庭菜園にしていた隣接地に夫婦二人用の家を作って、私達よりは家族の多い息子一家に譲ったのだ。

すぐに息子嫁の千佐子さんとあつ君が出てきた。少し遅れて智くんが登場する。

智くんと私がふたり並んで恒例の出発写真を撮ってもらう。

帰宅後の紀行文に載せる写真のことを考えて、私のケータイで撮ってもらう。

それでは「行ってきま～す」



（行ってきま～す）

新横浜発“のぞみ213号”は定刻9：19に発車した。名古屋着10：41、東海道本線に乗り換え10：50発、清洲には10：57着、予定通りである。

新幹線の中で今回の旅の狙いを智くんと話す。

「智くん、おじいちゃんが貸してあげた山岡壮八の織田信長を読んだ？」

「うん」

「第2巻の桶狭間の部分だけでもいいんだよ」

「1巻と2巻を読んだ」

「そうか、それじゃあ桶狭間の戦いのことはわかるよね」

「う～ん」

「桶狭間の戦いはね、今川軍と織田軍の戦いだ。駿遠三すんえんさんの太守今川義元が尾張の織田信長を攻めて行って、逆に桶狭間で信長に首を取られてしまうんだ。このとき徳川家康は松平元康といってたんだが、今川軍の一武将だったんだ」

「うん」

「駿遠三すんの駿すんて、どこのことかわかる？」

「う～ん、す・ん・ぷ？」

「駿河のすんだよ。すんぷは駿河の府中を略していつている。府中は中心の町のことでこの国にも府中があった。東京の府中は知っているだろ」

「うん」

「じゃあ、遠えんはどこだ」

「え～と、とおと・・・」

「遠江ととおみだよ。じゃあ三は」

「三河」

「ピン、ポーン」

「今回の旅の第一日目と二日目では、この桶狭間の戦いで織田信長の辿った跡を追いかけていくんだ。第三日目は松平元康が辿った跡を追っかけだ。信長は居城の清洲城から熱田神宮に行った。そこで兵を集結させた。だから、まず清洲城から始めるぞ」

「うん」

「ところで、そこへの行く道だけど・・・」

「大丈夫だよ、ぼく、スマホで見つけるから」

「よし、いいぞ、じゃあ、今回の旅で、智くんは案内人だからね」

「わかった」

清洲駅に着いた。智くんはさかんにスマホをいじってる。

でも、外に出たら何のことはない「清洲城」という看板が矢印と共に見えた。

探すまでもない、線路沿いに歩く。

智くんは盛んに「あっちい」と言いながら、耳の後ろやあごの辺りの汗を素手で拭いている。

15分位歩いたらどうか、ちょっとした木陰のある小公園のようなところに着いた。

清洲古城跡公園で、見覚えのある「右大臣織田信長公古城跡」という碑が見えた。

あれはH16の8月だから、もう、13年も経っている。

私には“地獄の社長特訓仲間”という経営者仲間がいる。

H8の10月に「特設社長3日間合宿・地獄の訓練」という講習を受けた。

その時の地獄の特訓仲間達である。

東信電気では、管理者に昇格するためには必須の合宿訓練を受けなくてはならない。

それは管理者養成学校が行っている10日間の地獄の特訓だった。

管理者にやらせるにはトップも自ら行って見ないといけないというわけで、社長用の特別コースに参加した。2班で20人の仲間がいた。

独特の訓練だったので仲間意識が生まれ、訓練が終わってからも年に1度位会っていた。

8年目は中京地区の3名が幹事で、岐阜の長良川で鵜飼いを見ながら旧交を温めようとの企画だった。

私は集合時間よりずいぶん早くに行き、岐阜城に登ってから会合に出席した。

次の日、解散してから、大垣城に行き、帰途立ち寄ったのが清洲城であった。

碑を見て、信長はここに居たんだ、桶狭間はここから出陣したんだと感激した覚えがある。

「ここが信長時代の清洲城跡だ。智くんそこに立って」

「うん」

「はい、パチリ」



(信長当時の清須城址)

あまり広くも無い場所に碑だけがポツリと建っている。

智くんはどうという事もないじゃないかというような顔をしている。

「向こうに天守閣もあるから、行くよ」

「うん」

この一角を抜けると五条川があり、赤い橋が架かり、その向こうに天守が見える。現在の清洲城だ。智くんはその城より川の手前にある休憩所が気になったようだ。売店がある。

そこで、水分補給をしようと中に入っていった。  
水を飲む間もそこそこに土産展示物を見やっている。  
まだ旅も始まったばかりだ、土産もないだろうと口には出さずに智くんを促して天守に向かった。  
天守があると、見た目はぐんと城らしい。智くん、先頭に立って進んでいった。



(現在の清洲城)

「入場券を2枚ください」

「えっ、1枚、1枚ですね。大人1枚子供1枚ですね。」売り場の女性の声。  
「え、ええっ」と私。

私は、中学生からは大人料金だと勘違いしていた。入場券売り場の人は、智くんを小学生と間違えたのかと思い

「儲かっちゃったね」と智くんに言うと、  
「子供は小、中学生って書いてあるよ」と抗議されてしまった。

天守の1階は「清須の成り立ちと歩みを知る」、2階は「関東の巨鎮・清須の全貌を体感する」、3階「清須が育んだ先人たちの偉業にふれる」4階「清須の天主で浩然の気を養う」

それぞれのテーマがあるようだが、智くんは3階の火縄銃体験シアターでの火縄銃の扱いが気になったようだ。

「ずいぶん重いよ、どうやって扱うのかな」と聞くので、  
「(私に聞いたって知らないよ)」と思ったが、  
「その画面を見ながらやったら」とごまかしておいた。  
後で聞いたことだが、智くんとしては、初日ではこの火縄銃が一番印象に残ったようだ。

望楼からの眺めを楽しんで天守を後にした。

再び赤い橋を渡り、五条川沿いにJRの陸橋をくぐり、売店が気がかりな様子智くんを知らん振りして、清洲公園に向かう。  
清洲公園には織田信長の像がありパチリとやる。



(織田信長像)

「この写真、紀行文のトップに使えるかな」と思っても見た。  
濃姫像も見て、さあ、駅に帰るぞ。

「智くん、どっちに行けばいい？」

「ちょっと待って」、スマホと相談している。

「名鉄の新清洲のほうが近い」

「どっちよ」

「あっち」と指差した。

しばらく歩く。

「う～ん、どこを曲がるのかな～」

「あそこの角かな」

「う～ん、そこに行かないとわからない」スマホと首っ引きしている。

すると向こうから中学生らしき女の子が近づいてきた。私たちを見ないようにしている。

「すみません」私が言うと、なにか警戒するような目で私を見た。

「新清洲の駅はどう行けばいいんですか」 ああ、そのことかというような顔で、

「あそこの角を右に曲がれば行けます」とにこっと笑った。

角まで来た。

「あつ、ここを右に曲がればいいんだ」とスマホを見て智くんが言う。

「(もお、そんなこと、さっき女の子に聞いてわかっているよ)」

新清洲 12 : 40、須ヶ口で急行に乗り換え、12 : 50 発、神宮前 13 : 05 に到着。  
熱田神宮は目の前にある。

「智くん、熱田神宮にお参りする前に昼食にしよう。鰻のひつまぶし。蓬萊軒神宮前店はどこ。昼時はずいぶん、混んでいるらしいよ」

「うん、任しといて。あつ、こっちだ、先に信号渡っちゃおう」

熱田神宮沿いの道を歩く。

向かいの道沿いに老舗らしき店が見える。

「おじいちゃん、あの店なんだろう」  
「おおっ、ずいぶん老舗に見えるね。あっ、きよめ餅って書いてるよ」  
「食べたいね」  
「うん、でも昼飯前だから、食べ終わってデザートとしてどう」  
「いいね」にっこり笑ってる。

「あの店かな、あれ」  
「う～ん、違うな、天ぷらって書いてある。蓬莱軒は鰻の専門店だよ」  
「そうだ、もうちょっと右だ」  
「あっ、あれだ」

熱田神宮の左先端ほどに来たのだろうか。右手には木の大鳥居が見える。その先はうっそうとした木立が続いている。左手の3軒目くらいに看板とお兄さんが立っていた。時計は13:20を指していた。どうやら、お兄さんはお店の整理係りのようだ。

「何人さんですか」  
「二人です」  
「14:40頃になりますがよろしいですか」  
「えっ、そんなにかかるの」　こりゃだめだなと思った。駅からの通り道には鰻のひつまぶしを食べさせる店はいくつかあった。そっちにしようかという思いで智くんの顔を見た。  
「どうする」  
「……………」　彼は待つ気充分の顔つきで私を見つめる。  
「そう、じゃあそうするか」  
「14:40でお願いします」

どうせ、ひつまぶしを食べたら熱田神宮にお参りすることになる。  
何と言うことはない。熱田神宮にお参りしてから、ひつまぶしを食べよう。  
それでも、ひとり旅だったら待たなかつたらうなと心うちでつぶやいてみた。

木立の間を通りながら本殿に向かう。  
「明治神宮に似た感じだね」  
「……………」　智くん、何も言わず。

本殿でお参りする。  
智くんはお賽銭を入れてお祈りした。  
私はポケットを右手で探った。500円玉しかない。  
やめた、ただのお祈りだけにした。

まだ10分くらいしか経っていない。時間をつぶさねばならない。  
横に出て神宮の外に出てみよう。

出たのはさっきの駅前だった。

神宮沿いの道を行こうとした私を押しつけて道を渡ろうという。

「だって、向こうの道沿いにはお店が並んでいるもん」

食い気の張っている智くんらしい行動でした。

錯覚だろうが、歩きがさっきよりはずいぶん早い。

すぐに、「きよめ餅総本家」の前に到達する。

智くんではなく、私の足が勝手に店の前に行き、手が勝手にガラス戸を開け、中に入った。

「きよめ餅、二つください」 口が勝手に1ヶ120円を2個注文する。

智くんがにこっとする。

店内のちょっとしたテーブルに今買ったばかりのきよめ餅を乗せ、椅子に腰を下ろす。

「うまい」 智くん、幸せそう。

「うまいね」 こし餡大福の小判型で、甘味も少し抑えたようで美味かった。

その先にはもう店舗は無かった。ゆっくり歩いたが、蓬萊軒には14:00前には戻って来てしまった。お兄さんがいいですよというので店の中の待合室に入れてもらった。

5, 6組が先客だったが、後からきた二人連れがどんどん先に案内されてゆく。

結局は時間通りに2階の和室大広間に案内される。いつもだと、座布団を何枚もたたんで椅子代わりにするのだけどそうもいかない。壁際に背をもたれて辛抱するしかない。

待ってました、ひつまぶしが運ばれてきた。ちょっと小振りに見えるが、碁石入れの親分みたいな器に入っている。薬味に、ねぎとワサビときざみ海苔が付いている。後はおすましと香の物。



(ひつまぶし)





ひつまぶしの食べ方として葉が置いてある。①そのまま茶碗に入れて食べてください。  
②薬味を乗せて食べてください。③お茶漬けにして食べてください。  
智くんも私も4等分に分けた。  
④自分の好きな食べ方でもう一度  
二人とも①を二度目に選んだ。

器が小振りに見えたが、どうして、どうして、量は充分あった。  
この鰻は関東のように蒸してはおらず、直接焼いているのだろう。しかも、小さく刻んで  
いるので余計に食感はコロコロして締まっている。

「うま〜い」  
「うん、うまいね、待っただけあったね」

店を出て気がついた。熱田神宮で写真を撮っていない。  
すぐそばの大鳥居まで戻って写真を撮ろう。  
ここでは私を撮ってもらった。右手で鳥居の向こうを指しているポーズだ。  
言葉をだした。  
「ものども！ ゆけー！」

織田信長は今川義元が尾張に攻めてきたとき、はじめは清洲城で悠々としていた。  
家老達が籠城か打って出るかを激論しても、どこ吹く風、態度を明らかにしなかった。  
敵の大高城を囲んでいた味方の丸根砦、鷲津砦が落とされたと聞くと、即座に「出陣！」  
と叫び、湯漬けを食べ、馬に乗り城を飛び出した。後に続くものわずか。行った先が熱田  
神宮だった。ここで兵が追いついてくるのを待ち、熱田神宮で戦勝祈願をし、桶狭間目指  
して進軍していった。

私が「ものども！ ゆけー！」と叫んだのは、もちろん、当時の信長に成り代わってや  
ってあげたのだ。  
さて、シャッターを切った智くんは、そのことに気がついてくれただろうか。  
いいんだ、私は、自己満足でいいんだから。



(ものども、ゆけー)

もう。本殿まで行って写真を撮るのは面倒だから、このまま今日の最後の目的地「宮の渡し」に行くことにした。

「宮の渡し」は「桶狭間」との関連はない。

でも、この地に来たらぜひとも行きたいところだ。

東海道53次は海沿いの陸地に行く。ただ一箇所だけ船で行くところがある。

それが、ここ「宮」から「桑名」までである。

距離が七里なので「七里の渡し」ともいう。

ちょうど国道16号線が久里浜から金谷の間だけフェリーで繋がっているのと同じだ。

どの方向へ向かって行けばいいのだろう。

「智くん、頼むな」

「わかった」 スマホ君に尋ねだした。

「あれ、雨が降ってきたよ」

「本当だ」

「傘を広げな」

「うん」

広い交差点に来た。雨は強くなってくる。

右の角に店があった。

「あっ、ここ蓬萊軒だ。本店かな。そうか、米君が言っていたのはこちらのほうだな」  
熱田神宮に行ったら蓬萊軒のひつまぶしを食べるといいよ。そう教えてくれたのは中学からの友・米原氏だった。仕事で来るとよく地元の人に連れて行ってもらうと言っていた。ガイドブックで見たら店が二つあったけど、今回は神宮に近い方の神宮前店に入ることにしたのだが、こちらは入れる定員は少なそうだが、趣のある店構えだった。

店を右手に見て進むと、どうやら目的地は近そうだった。

「ここだよ」 頼もしき案内人がいう。

横断歩道を渡ると海沿いの公園のようである。

右手に鐘楼が見える。

「あそこで写真を撮ろう」

「鐘楼も、常夜灯も、七里の渡しの碑も撮ったぞ」



(七里の渡し)



ウォーキング姿の旅人らしき人が、同じように写真を撮っている。

とたんに雨が激しくなってきた。

辺りを見渡す。

屋根とベンチのある休憩所が向こうに見える。

雨宿りしている人がひとり見える。

「あそこへゆこう」

あわてて走りこむ。

さらに雨は激しくなる、

一人、二人と雨宿りする人が増えてきた。

雨はなかなかやまない。

私の相棒はスマホのゲームに熱中している。

彼には退屈という時間は無いらしい。

私はそろそろ口寂しくなってきた。

「あいにくの雨ですね」 先ほどのウォーキング姿の旅人に声をかけた。私と同年代に見えたし、他の3人はどうも話しに乗ってきそうも無いように見えた。

「えっ、そ、そうですね」 と彼が答えてきた。

「どちらからお越しですか」

「静岡からですよ」

「そうですか、どちらまでゆかれるのですか？」

「私、実は東海道53次を歩いてるんですよ」

「じゃあ、京の三条大橋まで行くのですか」

「ええ、まあね」

「そうですか、私は日光街道と大山街道はやったのですが、東海道では3年は掛かりそうなので、まだためらっているのですよ」

話の花が咲いてきた。

彼は静岡の藤枝に住まいしていて、月に3、4度ほど東海道に挑戦している。時には奥さん同伴で歩いていると言う。今日は桑名辺りまでをと考えていると言った。

そうこうしているうちに空が明るくなってきた。もう雨宿りして1時間くらいは経っただろうか。彼は立ち上がり、智くんに声をかけた。

「君、おじいちゃんと一緒にいいね。歴史にも興味があるのかい。テーマがあるんだから面白いね。いい旅になるといいね」

スマホと格闘していた智くんは、えっ、俺のこと、とでも言うかのようにこくりと頷いた。

本日の訪問地はここまで、あとは宿泊地までだ。ナビは智くんで、頼もしくスマホに聞いている。

「おじいちゃん、こっちだよ。地下鉄の伝馬町駅があるよ。」  
なんとも頼もしい。私はただ孫の後についてゆけばいいだけだった。

伝馬町駅発16:50、金山駅着17:00、ホテルは目の前にあった。

「名古屋金山ホテル」、1泊朝食付き、2名で21,000円である。



(名古屋金山ホテル)

荷物を降ろして、まずはホテルの大浴場で汗を流す。このホテルを選んだのは大浴場があるからだ。ゆっくり手足を伸ばせば、今日の疲れも充分取れる。

湯を上り、ホテル上階のレストランに夕食の下見に行く。日本風居酒屋だ。よしよし、手羽先があるな。智くんは名古屋では手羽先が食べたいといていた。これさえあれば大丈夫。席は予約せずとも良いとの事で安心して部屋まで戻り小休止。

一時間ほどベッドの上でゴロンと寝そべる。風呂上りでもあるし気持ちが良いことこの上なしだ。行儀が悪くたって、ゴロンタほど気持ちの良いものは無いね。

19:00頃かエレベーターで上階に上がり旅籠茶家「かやかや」の暖簾をくぐった。明るく、ひと気のなかった先ほどとは違い、がやがやとうるさい。

「えっ、ここはホテルのレストランだろ、団体客が多いのか、まるで町の居酒屋そのものだね」

テーブル席に案内される。智くんは手羽先の唐揚げとお寿司の太巻きを頼む。

私はほっけの焼き物、里芋の香葉コロケ、きゅうりの一本漬そして生ビールにした。

ビールは美味かったが、しばらく肴をつついたがあまり食欲が湧いてはこない。

それもそうだ、鰻のひつまぶしを食べ終わったのは15：00も大分過ぎていただろう。そんなにお腹は減ってないのに気がつく。

智くんはと見ると、手羽先の唐揚げと格闘している。結構大きい、三つもある。肉嫌いの私では手助けできない。

「残しておいてもいいんだよ」と言ってやったが、責任感なのか意地なのか、彼は何とか片付けた。ふーふーいっているようなので、太巻きのほうはいくつか手伝った。

後で聞いたが、がやがやと、とりわけタバコの煙が気になったようだ。

食事はそこそこにして部屋に戻り就寝する。

かくして1日目は過ぎていった。

第2日（8月19日）

今朝の朝食バイキングは何種類もの食材があり、豪華で美味しかった。今まで食べた朝食の中でも上位に当たるだろう。昨晚は控えめだったからなおさらだ。それで、元気一杯、9：13に出立した。

金山発（9：26）、鳴海着（9：36）、鳴海城址は駅から見える近さにあった。

桶狭間の戦いの頃、今川は尾張に橋頭堡として鳴海城と大高城を持っていた。信長は両城を牽制するため鳴海城には善照寺砦、中島砦、丹下砦を、大高城には鷲津砦、丸根砦を築いた。清洲城から出陣した信長は、熱田神宮に集結した兵2000を率いて鳴海城を取り囲んでいる善照寺砦から中島砦を経由して桶狭間に向かったのだ。



（智くん遊ぶ）

鳴海城址は小高いところにあった。鳴海城址公園の文字が見える。ちょっとした広場がありコンクリート作りの小山があった。智くんがすすと登ってゆく。すべらないようにと余計なお爺ちゃん心配を私はした。周辺にはお寺が多く見かけた。

「桶狭間の戦い・人生大逆転街道・信長攻略」という看板に導かれて善照寺砦を目指す。一旦、坂を下りまた登ったところに善照寺砦があった。今は砦公園となっている。谷を隔てた向こうにこんもりとした森が見え、それが鳴海城なのだろう。当時は大変な緊張感を持って互いに対峙していたことだろう。



(善照寺砦跡)

そんなことは関係なく、智くんは疲れたといいながらブランコに乗ったり、物見台風の  
見晴台に上ったりしている。

さあ、次は中島砦だ。私はここが一番難所だと考えていた。事前の調査では川の合流点  
付近にあり、看板はあるとまではわかったが、地図を見てもどこかは特定できなかった。  
かなり、時間を割かなくては見つからないだろうと覚悟していた。

ところが、我が案内人はいとも簡単に私を連れてゆく。川っぶちの住宅地を疑いも無く  
進んでゆく。

「あっ、ここだ」彼が看板を覗き込んでいた。

住宅地の鉄柵にそれは掛かっていた。

それ以外には、何の痕跡もなかったが、まさしく「中島砦跡」と書かれていた。

文明の利器をもった彼の前には私の長年の経験も影が薄かった。



(智くんの得意そうな顔)

どうだ、中島砦をみつけたぞ

「さあ。次は有松だ」

「うん、こっちだよ」

また、彼が先頭に立った。

暑い、汗が滴り落ちてくる。まあ、しかし、私の夏のこだわりの旅では珍しくは無い。  
でも、智くんは堪えているようだ。さかんに汗を拭いている。そして、私にこう言った。

「おじいちゃんには参りました。おじいちゃんの暑さ強さには敵わないよ」

「うん、慣れているからな。じゃあ、有松に着いたらカキ氷でも食べるか」

「ほんと、いいね」

ひたすら歩いた。暑さにむなしい抵抗をした。有松はまだのようだ。  
すると、前方左側の喫茶店らしきお店に「氷」という布看板が見えた。  
どうしたことか、私の足が勝手に道を横断してその店に入っていった。  
「おばちゃん、氷イチゴちょうだい」

お客は私達だけだった。

智くんは氷メロンを頼んだ。

汗が引いてくる。こうなると私の定番だ。

「おばちゃん、ラムネかサイダーをちょうだい」

無いとのことだった。メニューにメロンソーダーという字が見えた。

「それじゃ、ソーダ水だけちょうだい」

残ったカキ氷にソーダ水をかける。

これが美味しいのだ。

「ぼくにも」と智くんが言う。

「おいしい！こんなのはじめて！」目が輝いていた。

そうでしょう、私にとっておきの食べ方、エンドースペシャルなんだから。

それを見ていた店のおばちゃんが智くんに言った。

「どこまで行くのおじいちゃんと一緒に良いね。ぼく、いくつ、小六か中一」

「中三です」少しふくれ面をしている。

「えっ、あっそう、」おばちゃん少し慌てている。

「おばちゃんの息子も中学の頃は小さかったけど、高校で背ものびていったから」

智くんはしらっと聞き流していた。

店を出て少し歩くと踏切を渡った。おばちゃんの言うようにそこから先は、もう有松の町だった。

私の事前調査では桶狭間への途中に「有松の町並み」がある。今は名古屋市<sup>の</sup>町並み保存地区に指定されている。江戸時代初期に尾張藩の命によって、鳴海宿と池鯉鮒宿との間に開かれた町である。ここの絞り染めは有松絞りの名で名物となっている。あの弥次喜多道中でも冷やかして入った弥次さん喜多さんが、あまりの値段の高さで手拭いだけ買って逃げ出したという話が載っているそうだ。

最近はこの保存地区が目につく。各市町村が観光資源として整備する方針を採っているのだろう。私の武将シリーズでも信長の「熊川宿」、家康の「関宿」、謙信の「矢原宿」と出会っている。

私たちはそぞろ歩きをして、両側の趣きある建物を見回した。実は、私は食事処を探していたがなかなか見つからなかった。智くんがとある店に入っていった。絞りの土産店だ。彼はお土産に関心があるようだ。どうやら、友達や家族への土産を買うのが楽しみのようだった。さほど大きくはない店内をぐるりと回って、取り上げたのは絞りのコースターだった。値の高い絞り製品の中では手ごろのようだ。

「誰に買うの」

「ママに」

「ふ～ん、じゃあ、おじいちゃんもお揃いで、れいれい（私の妻です）に買うか」

ふたりして土産袋を手に店を出た。



（有松の町並み）

右手に「有松・鳴海絞会館」という看板が見えた。

「ちょっと入ってみるか」

入場券は隣にある「有松山車会館」との共通券を買う。

「絞会館」では地元のおばあちゃんによる実演が行われていた。観客は私達二人だけ。布を糸で縛りながら、おばあちゃんが説明を智くんに向かって話す。どこに行っても主役は智くんなのだ。彼も興味深そうに説明を聞いた。二階の展示場も見て、隣の「山車会館」に行く。その時、私の目には向かいの古民家風のお店に「そば」の文字が見えた。よし、昼食の場所を確保したぞ。

「山車会館」には3台の山車が交代で展示されている。有松では、東町の布袋車、中町の唐子車、西町の神功皇后車の3台の山車が、10月第1日曜日の天満社秋季大祭に旧東海道を曳航され、からくり人形が演じられるそうだ。その布袋車が展示されていた。帰り際、会館のお姉さんが親切に桶狭間への道を教えてくれた。

お腹の減っていた我々は、早々に古民家風の「麵処・寿無限茶屋」に入っていった。智くんは「梅おろしソバ」と「蕨餅」、私は「ざるそば」と「くずきり」を美味しくいただいた。ここでも、帰り際に、お店のおばちゃんが桶狭間への道を教えてくれた。

「店を出て左に行ったら、信号を右に曲がって真直ぐいくんだよ。カーマの処を左にいくんだよ」



「カーマってなに？」

「スーパーだよ」

「ありがとう」

信号を右折して、また汗を出し出し歩いた。

大きな道を横断しようとした時、信号脇に付いている交差点名に目がいった。

おっ、「桶狭間」と書いてある。桶狭間に来たんだ。

しばらくまた歩いた。

大きな建物が向こうに見えてきた。それがスーパーマーケットのカーマということになり、冒頭の智くんの言葉となった。

「おじいちゃん、あそこだ、あそこを左に曲がるんだ」

「うん、あれがスーパーだな、カーマって書いてある。あのおばちゃんの言う通りだ」

まもなく、向うの公園らしき所に青い幟が見えてきて、桶狭間古戦場公園に到着した。



(桶狭間古戦場公園)



この古戦場公園には清須、熱田、おけはざま山、桶狭間などの位置関係がミニチュア風にあちこちに碑や看板が建っている。桶狭間古戦場田楽坪<sup>でんがく</sup>の碑も見かけた。田楽狭間で義元は討ち死にしたなんていう説の本も読んだことがある。その田楽という言葉を目にして喜んだ。私はあっちに行ったり、こっちに来たり、そのたびに目をつぶり同時に思いを寄せた。信長のどや顔や義元の無念顔が浮かんできた。桶狭間に自分は正しく立っていると、達成感があり満足だった。

智くんはと見ると、やはり、あっちに行ったり、こっちに来たりしていた。彼がどんな心境だったのかは私は知らない。

従来、桶狭間の戦いは、織田信長が今川軍の目をそらすため、善照寺砦から迂回路を進み、太子ヶ根<sup>たいしがね</sup>という丘陵上から、谷間に陣を構えた義元軍に奇襲をかけたと考えられてきた。私の中学、高校の頃の映画はみなそうだった。

しかし、近年の研究では「信長公記」などをもとに、善照寺砦から中島砦を経て、最短距離の直線路をたどって、信長軍が「おけはざま山」の義元軍を攻撃したという、今までとは違った合戦像も出されている。

つまり、先ほど私と智くんが辿った道でもある。その「おけはざま山」が近くにあるという。早速、行ってみることにする。公園のすぐ近くの住宅地の坂を少し上った。普通住宅の家の前に、板の説明板と碑があった。今川義元本陣跡・おけはざま山とある。パチリとケータイで撮ってもらった。



(義元の本陣跡)

そして、次なる目的地、もう一つの桶狭間古戦場跡を目指した。古戦場跡は一つではなかった。そこが戦場を特定する時の難しいところだ。この地を中心に2万を越える今川軍が展開したのだ。戦いに関する遺跡や伝承が広範囲に残っていても不思議ではないだろう。

住宅地が続いている。上って下って、もう一度上って下っていった。結構足に来ているようだ。それでも、孫の前では、あまり弱音は吐けない。彼の足取りも緩やかになってきたような気がする。ようやく公園らしき所が見えてきた。桶狭間古戦場伝説地である。

先ほどのよりは何かひっそりとしているようだ。先ほどのは近年に整備された公園で地元も力をいれているという感じだが、こちらの方は古びた公園のようだ。碑がいくつか立っており、石碑の配置図も立っていた。ここでも、パチリとやり、近くの駅に向かった。なにしろ、疲れてきたのだ。



(桶狭間古戦場伝説地)



「中京競馬場前」はもう5分も歩かなかっただろうか、駅前にひっそりと売店があった。「冷凍パイナップル」にとびついた。折りたたみ椅子にどでんと座り、冷凍パイナップルをしゃぶる。足の先のジーンとした足痛から開放され、意識は頭の中にゆく。ついに、念願を叶えたぞ、桶狭間をやっつけたのだ。快い陶酔感に浸った。

「中京競馬場前」から「名鉄名古屋」まで、そこから地下街を1駅歩いて16:20頃、宿舎の「ジャストイン・プレミアム名古屋駅」に到着。2名で朝食付き18,500円。シャワーを浴びてから、私は一寝入り、智くんはスマホと首っ引きですし屋探し。何しろ彼の今回の旅の目的はひつまぶし、手羽先、そして、寿司なんだから。まあ、何と言いますか、彼の食に対する執着心は私譲りなんでしょうね。これは、隔世遺伝だね。

「おじいちゃん、そろそろ起きな」智くんの声で目が覚める。18:00はどうに過ぎていたらしい。

「すし屋、見つかったかい」

「うーん、2つ、3つ」

「どこだ」

「えーと、地下街と駅辺り」

「よし、行こう」

先ほど、ホテルでチェックインしたときにフロントマンに近所にすし屋はないかと聞いた。1軒あるそうだが、私のイメージとは違っていた。来る時、地下街で1軒すし屋を見つけていた。うーん、いまひとつだなと思っていた。これは一つ智くんに任そうと考えた。

来た時の地下街を歩いて駅あたりに来た。何か苦戦しているようだ。今いる場所がわからないようだ。外に上がってみればわかるよと階段を登った。JR名古屋駅のすぐ前だった。名鉄百貨店ビル・上階のレストラン街に来た。ちょっと洒落た感じのすし屋だった。

智くんは特上寿司2,300円。私は季節の寿司1,700円と生ビールを注文する。追加のにぎり寿司も注文し、二人で8,424円を支払う。予算は一人5,000円だったから、まあ、こんなものか。智くんはとても美味しそうに食べ、満足顔だった。人の喜ぶ姿は何といっても良いものだ。

彼は帰りに土産物屋に寄りたかったようだが、名古屋駅前ではそれらしきものは見つからない。残念がっている。どうやら彼の旅の目的は食べ物と、そしてもう一つ、お土産買いのようだぞ。

ホテルに帰った。今日は大分歩いたことを足の疲れが教えてくれる。いつも持っている歩数計を見た。目を見張る。そして、智くんに叫んだ。

「智くん。新記録だ。23,700歩だ」

「ほんと、やったー！」

じつは、昨日、今年の私の最多歩数についての話が出た。23,215歩と教えていた。それを破ったのだ、近くのすし屋でなく、駅まで歩いたのが決めてとなったようだ。

智くん、喜ぶこと、喜ぶこと。

気分を良くして、早々に寝る。かくて、第2日は終わる。

第3日（8月20日）

朝食バイキングは良くも悪くもなし、まあ、普通のやつだった。

9：20 出立。昨日の地下街を通過して名古屋駅に。

JR名古屋発9：49、大高着10：03。ここから鷲津砦、丸根砦、大高城に向かう。

信長が桶狭間で今川義元の首を取った時、徳川家康（当時は松平元康）は大高城にいた。今川軍が三河から尾張に侵攻する頃、今川方の城は尾張では鳴海城と大高城だった。

信長はこれを牽制するため砦を作ったが、大高城には鷲津砦と丸根砦を構えた。

今川義元は戦闘の始めに鷲津砦には朝比奈泰朝を、そして、丸根砦には松平元康にその攻略を命じた。二人は競争するかのよう攻撃したが、まず始めに元康が丸根砦を落とし、ついで朝比奈が鷲津砦を落とした。

義元は幸先の良い戦勝に喜び、元康には大高城に入り休息方々遊軍として命令を待てと命じ、そして、自分は運命の桶狭間に向かった。

元康はこの大高城で義元の討ち死にと今川軍の敗北を知った。

このままでは織田軍の攻撃を受ける。逃げなくてはならない。

元康の向かったところが自分の旧領である岡崎城だった。

私と智くんの今日の行動は、この松平元康が辿った後を追ってゆく予定である。

大高駅のすぐ近くにこんもりとした緑がある。そこが鷲津砦跡だ。鷲津砦公園の碑でパチリ、説明板を読む。私には頭に入っている文字を読んでいるようなものだ。智くんともども、やぶ蚊と格闘しながらちょこっと散策してみた。



（鷲津砦跡）



（丸根砦へ）



（丸根砦跡）

次の丸根砦に向かう。ルートを心配したが電柱には「史跡散策路・丸根砦跡」とある。

智くんはスマホに、私は電柱に従って行動する。一旦下ってまた坂を上るとそれらしき所があった。草を掻き分けちょっと登ると丸根砦址という碑があった。が、それだけであり、他に見所はなし。

ここから大高城に向かう。坂を下りきると全面には大きな緑地が見えた。線路の下をくぐり向こうに出る。ここからは智くんの出番だ。スマホ君お願いね。真直ぐだ、右だと頼もしく私を案内してくれる。時々迷っているようだが、それでも、まあ、合っているのだろう。ところどころに見る地番表示などが、私の経験からもうなずける。

「あっ、ここ左に上がってゆくん」智くんがいう。

本当にそうかなと若干疑っていた私も向こうにそれらしき森が見えたので、

「うん、あれだな」と答えた。

ところが、ずいぶん手前に大高城址公園入口という看板があった。私の経験も当てにはならないようだ。

入口もわかり、本丸らしきところにも出たが碑だとか説明板が見当たらない、後からわかったのだが、駅から直接来る方が表口で、我々が入って行ったのは裏口のようなのだ。

人が踏みしめたような道が二つに分かれている。

「智くん、左から行ってみて。わからなかったら、すぐ戻って来るんだよ」

「うん、わかった」

私は右の道を行く。すると向こうから中年の男の人がやってきた。

「すみません、向こうに説明板とか碑がありましたか？」私が尋ねると

「ええ、直ぐ下にありますよ」と人懐っこく答えてくれた。

しばらく話し込んだ。

彼は名古屋在住の教師という。お父さんが横浜にいたとって親しげに話してくれた。

地元の人意外に地元を知らないのが、休みの時に良く歩いて回るんですよとか、名古屋出身の有名人が多いのですよと言った。もっと突っ込んで話そうと思ったが、智くんのことを思い出した。早々に切り上げて、下に下りた。説明板や碑があった。読んでいると智くんがやってきた。やはり、どちらからもいけたのだ。



(大高城跡)



(説明案内板)

二人して更に下りると、まもなく人家があり駅も近そうだ。

駅のコンビニでアイスを買って食する。こういう買い食いって美味しいものだ。  
大高駅には11:50到着だった。

ここから岡崎城に行く。

「大高」からJRで「共和」で快速に乗り換え「岡崎」に着いた。予定では以前行った名鉄の「岡崎公園」からであったが途中で気が変わった。「岡崎」なら30分ほどで到着できたからだ。ところが、ここからでは岡崎城には徒歩では行けないほど遠かった。あまり、計画は変えないほうが良いものだ。それで、タクシーで岡崎城まで行った。ちゃんと、タクシーの運転ちゃんからは帰りは名鉄の「東岡崎」から乗るとよいとヒントを貰っているので、まあ、転んでもただでは起きないというやつだ。

直ぐに岡崎城に到着。城門前でまずパチリ。城内の「八千代本店」を目指す。



(岡崎城の城門前で)

13:00になっていたからお腹の虫も騒いでる。ここは初代が茶懐石で出した木の芽田楽(豆腐の田楽)が評判となって創業した。備長炭で焼き上げた竹串の田楽は、ふっくらと軟らかな豆腐の食感と八丁味噌の風味が絶品だ。てな宣伝文句に踊らされて、是非食べてみようと思くんに話しておいた店だ。

なめし田楽定食を、思くんは天ぷら付を、私は刺身付を、共に2,500円で食した。田楽の八丁味噌は私には良かったが、思くんにはちょっと辛かったのか6本あるうち2本ほど残したみたいだ。



(木の芽田楽の  
なめし田楽定食)

お腹も満ち足りたので、歩みも軽やかに天守閣に登った。お定まりの展示物があったが、思くんが興味を示したのは版画の5色刷りだった。私一人だったら見向きもせずに通る

過ぎたろうに、こういうところがひとり旅と決定的に違うところだな、などとへんなことに感心していた。



(刷り絵作成)



天守閣を下りて、堀の外の船着場や素晴らしく大きな藤棚を案内した。何しろ私は岡崎城にはもう2回来ている。今回で3回目なのだ。

岡崎城で松平元康は誕生した。三河の松平氏は、尾張の織田氏と駿河、遠江の今川氏の間に挟まれ、大国間の弱小国として悲哀を味わった。元康は幼くして、始めは織田の、次には今川の人質になった。特に今川では8歳から19歳まで11年間も駿河で過ごし、そこで今川縁故の娘を娶らされた。岡崎は今川の将に占領されていた。

そこに桶狭間の戦いが起こった。大高城で今川の敗戦を聞き、退却を余儀なくされた。その時入ってきた情報が、岡崎城が空き城となっている、織田の攻勢を恐れて城将、城兵達が逃げてしまったのだ。これ幸いと元康たち三河勢は岡崎城に入城、囚らずも旧領回復となった。こののち、元康は織田と同盟を結び、徳川家康と改名し、信長、秀吉のあと天下を統一し徳川幕府を開くことになる。だから、桶狭間の戦いで勝利を得たのは信長であるが、それに劣らず、元康も実利を得たことになった。

私達は、また、城内に戻り、家康像を見たり、からくり時計の演技時間を待った。その土産店で、智くんはようやく友達への土産を買うことが出来て上機嫌。また、カキ氷とラムネを食しているうちに、からくり時計がカタコトと動き出した。



(徳川家康像)



(からくり時計)

「東岡崎」の駅へは15分位歩いただろうか、ここでも智くんのスマホが威力を発揮する。15:36名鉄特急で名古屋には16:08到着。予定より13分早くに帰れた。

名古屋駅のデパ地下で夕食を探す。

「おじいちゃん、これ買っていい！」 智くんの弾んだ声。大学芋だった。

「うん、いいよ」 まあ、喜んでいる。

智くんは、他に納豆巻き、ネギトロ巻き、焼き鳥を2本買った。

私は、何か食欲が湧いてこない。おはぎを2つだけにした。

名古屋発17:02、新横浜着18:25だから、あつという間になってしまう。

けっきょく、智くんはネギトロ巻き、大学芋は家にお持ち帰りだった。

私は、おはぎ2つをぺろりと平らげた。

新横浜で定番の崎陽軒のシュウマイを買った。

そして、ただいま〜と帰宅した。

今回のふたり旅を振り返ってみると、

なんといっても、孫と2人っきりで3日間を一緒に旅をしたということだ。周りの人から言われた。中学も3年になる男の子が2人きりで付いて来るって珍しいよと言うのだ。でも、私から言うと、私と孫との間で、いや、もつという私と人との間で、私と一緒にではいやだと言う人はいないだろうと思っている。ましてや可愛い孫とだよ。そうは思っても、そのように周りの人に思われることは悪い気はしないものだ。



(旅の仲間)

智くん

次に、智くんがこの旅で興味を示したことは何だったのか。

清洲城で火縄銃をいじったこと、カキ氷にソーダ水をかけたこと、歩数計の新記録に喜んだこと、刷り絵を制作したこと、土産物を選んでいた時、デパ地下で食べ物を選んだ時、それと、やっぱり、食べ物だな。ひつまぶし、手羽先、お寿司、きよめ餅、朝食のバイキング、食に対する好奇心は私譲りだな。思い出すと、ほほえましいものだ。

それと同時に、目的地を見つけようと私を引っ張っていった時の頼もしさだ。日ごろ、家では何も考えず頼りないなどと耳にするが、どうして、どうして、ちゃんと役を果たそうとがんばっている様には、彼の別面を見た気がして嬉しいものだ。これも、2人きりの旅をしてわかることだな、ウン。



一方で、ひとり旅と違って人との関わり方が少なかったのは残念だ。  
これはそういうものなのだろう。会話は、主に連れとの間になるし、相手が話しかけてくるにしても、それは智くんに対してとなる。仕方がない、何しろ主役は智くんだからな。  
それと、ハプニングもあまり起きなかった。私の行動も連れがいると慎重になるし、何を決めるのも相談事になるからな。旅の仕方それぞれに一長一短があってしかるべきものなのだろう。

かくて、今回の旅では、鳴海城、大高城と私の城コレクションに202番目、203番目の城が加わり、歩数計によると、1日目が17,742歩、2日目は今年の新記録、23,719歩、3日目は22,237歩であった。合計で63,698歩を歩いたことになる。こうした記録を残して、こだわりの夏休み2人旅は終わった。



(信長、義元と共に)